

2022年6月

課題本『僕はイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

ブレイディみかこ/著 新潮社 2019年

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

副題は、英語表記です。「Real」は、日本語でなんと訳せばよいのか分からないのですが、「実録」というのかもしれませんが。

イギリスでの生活が主体の家族なので、カタカナ語の多い作品でした。あまり英語に馴染んでいない私は“日本語では、なんというのかな”と探しながら読むのですから、度々流れを切断することになります。多くの英語の日常語が、そのままカタカナ表記で通用する時代になってきているのだということを痛感しました。

東洋人の「わたし」と、ヨーロッパ人の配偶者と、息子が一人。この三人家族でイギリスの南端にあるブライトンという街に住んでいます。「わたし」は、20年以上前からの住人のようです。

日本人の母親である「わたし」が、外国で、我が子の通う学校について語る本は、古い記憶で、『ミュンヘンの小学生』(子安美知子 1965年 中公新書)を、先ず思い出します。あれから50年ほどの間に、シュタイナーはもちろんですが、外国の教育理念や手法が次々に取り入れられ、身近な先生方の海外研修派遣も大に行われました。そして、今、文科省から出されている教育方針の骨子は「アクティブラーニング」とカタカナで表記されています。これまでの学校教育の受動的学習を、逆の能動的学習にするため打ち出されたのがこのカタカナ語。日本語は解説に使われるという位置取りです。

日本語文化を基本に暮らしていると、翻訳という手順を踏まなければ、外国のものには迫れません。しかし、翻訳語が、ぴったりと相手の意と重なるかどうか疑問に思うこともありました。誤訳なのだろうけれど名訳だったりすることもあります。(『名訳と誤訳』中村保男 講談社現代新書 1989 で感嘆したり)、それでも、だいたいこんなところかなと通り過ぎている現状です。世界共通語として人工のエスペラント語も提唱されましたが、135年経た今も国際語にはなり得ず、相変わらず地上の言語は「バベルの塔」状態だと私は見えています。

この本では、「中学校」と訳されているセカンダリースクールですが、学制の異なるイギリスだから、日本の中学校3年間とは違うでしょう。11歳から16歳までの5年間在学する生徒の集団です。

牧歌的なカトリックの小学校を卒業した息子と「わたし」を、中学校で、レイシズムの激しさに直面しました。「レイシズム」。日本よりも目に見える形で強烈な歴史と現実を持つ欧米での状況は、そのまま「レイシズム」としてであい掴まえて記した方が良いかなと思います。訳語「人種差別主義」では、欧米の現実が見えてきません。言葉は、歴史や思想を含むものだと

思いますから、「人種」という日本語で浮かんでくる内容は、考えを深めにくいかと思うのです。

〈イギリスの今時の中学生がおもしろい。〉筆者は、息子の通う中学校を通して、その生活の面白さを興奮した口調で書き進めています。

音楽とダンスと演劇。イギリスの学校文化の特徴として筆者があげたものですが、孫娘と同居している私は、日本との違いが想像できました。

孫娘が通った中学校にはダンス部がありませんでした。そこでダンス部を作ろうとしましたが、簡単ではありません。ヒップホップのダンスなんて、まだ学校からは遠い文化でした。同好会から始めて数年後、やっとダンス部として学外の大会にも出場するようになりました。世間が、生徒の楽しむヒップホップを身近な文化として認知したのだと思います。これが数年前の日本でのお話。ダンスはあっという間に広がって、今では、色々な場面で目にします。

ダンス部に昇格するまでの学校や保護者の反応を見てきたので、ダンス、音楽、演劇が特筆されるのも、日本の学校文化との違いが示されるのだと頷きました。演劇は、かつて学校の中でそれなりの位置を占めていたという記憶があるので、現状を考えると、日本の学校文化の変遷も感じます。

その国の社会体質の問題が、具体的に出てくるのが教育現場です。根強いレイシズムも、息子の周囲の描写でいくつも具体例が見て取れます。「多様性推進」とは言いますが、白人と非白人の区別によって生じる格差や対立など、騒然としたニュースが絶えません。人の序列化につながる価値観が、レイシズムの源流だと思います。

息子のノートにあった、そして題名にもなっている「ぼくはイエローでホワイトで、」という部分は、「母親のイエロー、父親のホワイト」をさしているでしょう。そして、そのことで生じる気分は、ふさぎ込む感じでブルーなのだと息子は感じました。

ブルーは、レイシズムへの反感をふくんでいます。

〈幼児は、禅の心を持つアナキストだ。〉筆者は、そう書きますが、幼児が成長するということは、この禅の心を周縁化することにつながると思います。

この息子は、体外受精でうまれているそうです。それについては「うちの家庭もオーセンティックだな」とうけとめる息子なので、読んでいる方も安らかでした。

だいたいこの息子は、母である「わたし」も認めるように、大人にとっては「いい子」の部類に入るので、いずれの事件や問題も、波瀾万丈には展開しません。深刻な問題点はいくつも指摘されていますが、冷静な視点で描かれています。息子の友人たち一人一人には、追っていきたいような複雑な絡まりを感じますが、どの問題も、現代社会が、現在進行形の難問としてぶつかっていることです。

「いろいろあるのが当たり前」息子の言う通りです。イエローであろうと、ホワイトであろうと、それぞれに価値を持つのは同じです。ところが、そこにさえ他者を傷つける行為は生じます。カトリック系の小学校で、「神」の存在に触れたであろう息子は、他者を傷つけざるを得ない「人間存在」に対して、どう向き合うのか、その種を心のどこかに潜めていないか望みをかけてしまいます。

息子は、「ブルー」から「グリーン」に変わりました。コスモポリタン世代の「いい子」は、何を得て「ブルー」から「グリーン」に変わったのか、レイシズムをどんな色で眺めたいのか、この先を期待させます。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【YT】

イギリスの人種差別、格差社会が筆者を通してわかりやすく書かれていました。

複雑な社会を冷静に見つめ、その中で生きていくことは大変だけれども、自分にとって何が大切なのか、どう生きていきたいのか、という事を改めて気付かせてくれた作品でした。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』を読んで

◆【YA】

著者のブレイディみかこさんは、この本で多様性の中で生きることの大切さ、難しさ、また知らないことを知る楽しさ等を自分の家族の20年余りの生活を通して発信している。

多様性と言っても深いもので、個人ではどうしても出来ない性別や国籍、人種、民族等々、又個人による価値観や宗教、学歴、教育等々複雑なものがある。

イギリスは移民が多く、30年ほど前に成立したEUを2年前に離脱したのも、移民問題が原因とされている。移民を排斥するのは経済的な問題が大きいと思う。家族が暮らすブライトンも移民が多く、人口の20%を占めるとある。

著者自身が元底辺中学校と言う公立の学校へ通う息子の向き合う様々な問題は日本の学校とは大きな違いがありそうだ。仕事も問題が起らないように平均してやり通したい日本の教育と、経済格差が明らかな根本的な問題や、人種が違う生徒が多いブライトンの学校は日本とはかなり違うと感じる。

しかし、著者が「優等生の息子」と呼ぶだけあって、決して誰かに言われたでも無く、しっかり自分の考え、思いを伝えている。親が心配するのは普通だが、子どもは親が思っている以上に柔軟なしっかりした考えを持っている。学校生活の中で自然と多様性に向き合い、解決の糸口を身に付けることができるのかも知れない。子どもは伸びやかで自由な発想を持っている。

親、大人はもっと厳しいものが感じられる。先ず仕事、勤めが生活の大きい部分を占める。多様な人たちとの同じ価値目標を求める仕事はエネルギーを要する。その様な環境で生活するには何らかの解決の糸口を見つけ、妥協もあり、どこかで折り合いを付けねばならない。みかこさんの積極的な行動、例えば何らかの集まりやイベント等に関わったり、子どもたちとの直接的なふれあいは大切だと思う。

最近では多様性も広がりを持ち、社会的な見方も変化している。著書の中にも出ていたが、エンパシーの世界が必要であること、みかこさんはエンパシーを「他人の靴を履いてみること」と言っている。他者のことを理解・共有し、又他者の視点から物事を見ることが出来て、適切な方法で対応できれば、溢れる多様性の生活の中でうまく折り合いをつけながらバランスよく事が運ぶのではないかと思える。

今では世界(地球)も狭くなり、どこの場所でも様々な多様性に溢れている。これからの社会を担う子どもたちや若者が何れの場所でも生き易い希望の持てる未来であるようにと願う

ばかりである。そして、「学校で自国以外のたくさんの生徒と一緒に学んでいる」としたら、どんなに楽しく、新しい発見があるだろうと思う。

◆【 TK 】

昔の若い頃に海外への移住願望があり実際に考えたことがありました。ある人のアドバイスはまずとにかくそこに実際に行ってみてその空気をすって感じなさいと言われました。風景だけではわからない土地の匂いをかきなさいということでした。やはり行ってみるとその生活感がよくわかったのです。そして知り合いにその生活を聞くことでよくわかったのです。

この本はそんなイギリスに生活するとはどういくことかを描いています。

人種差別、格差、ジェンダー、貧困、宗教が入り交じった国なのです。

それにしても学生時代から政治問題やボランティアなどに関わって関心を持っていることが偉いと思います。日本は子供は大きくなるまで勉強だけです

多様性や人の考えが一つでないことが書いてありました。そして認めずに説教ばかりする人がいることも書かれていました。

自由と多様性を認めてなおかつ人が平和であることは難しいのか？と考えさせられます。

子供に色々な可能性を見いださせようと学校でミュージカルやバンドを企画したりするのはとても良い事だと思いました。画一化しない教育が素晴らしいと思います。

シリーズとして他の本もだされてますが興味深く思います。

◆【 R子 】

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』を読み進めると、どんどんブレイディみかこさんの考え方が私にとって心地よくて、「うんうんそうよね。」「そう！私もそう思う。」「でも、実際にそう思っているはずとその思いを貫き通せたかな？どこがブレイディみかこさんの人生観と違うんだろう。」などなど、自問自答が楽しくできました。

特に、読み進めっていると家族や周りの大人が一人一人の子どもを子ども扱いするのではなく、きちんと向き合い自分で選択させていることが私の理想の子育て像と重なり元気が出ました。次の本も読みたいと思います。

◆【 K子 】

今回の課題本で深く考えさせられた事は「多様性」についてです。年齢(もうすぐ80代)環境(小さな島)で育ち、暮らし、現在に至っています。過去を振り返ってみますと、いつも丸い土俵に乗っていたのでは…。時として障害のある人の土俵は少し違って位の分類の仕方ではなかったかと思います。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』には人種・宗教・性別・格差・環境・教育制度・他多数ありとあらゆる分野のことが登場します。母＝日本人(イエロー)、父＝アイルラン

ド人(ホワイト)、ぼく=ハーフ(ブルーなのは気持ち?)、この3人が絶妙なバランスを取りながら生活しています(イギリス在住)。ぼくの周りで起った色々な事例について、保育士の資格を持つ母親と常に話し合っって成長していきます。父親は時々の確な意見を吐く(?)のです。

現在日本でも「多様性」について多く語られ、具現化されていることが多くあります。これからは現在の社会に起っている多様なことに理解でき、「これもあり」「この様な生き方もO・K」と言える様に少し進化できたらいいと思いますが…。

「フレイディみかこ」さんの子育ては多くの人々のバイブルになっているのではと思いました。「ぼくのブルー」は今後何色に変化するのでしょうかね???

◆【 N2 】

リズムよく元気な言葉で書かれ、楽しく読みながら多民族階級社会の国、イギリスの普段見ることのない暮らしを知ることができました。

この母ちゃんは自分の意見を言いつつ相手の意見も聞き、お互いの意見を尊重するが、最後の決断は当事者に任せるという点が、とても素晴らしいなと思いました。

多民族が生活しているイギリスでは多様性を認めなければ上手く社会が回っていかないのでしょう。しかし多様性を認めると簡単に口で言ってもなかなか難しいということもわかります。エンパシー、LGBTQ、FGM,などの言葉が身近な暮らしに出てくるのは多民族が共存しているからなのでしょう。

作中に出てきた『リトルダンサー』は好きな作品で、最後に思い叶ったジミーの姿、アダムクーパーの白鳥がフワッと映るシーンにもしびれますが、これが貧乏や抑圧やジェンダー、セクシュアリティへの偏見のためチケットが売れず上映がキャンセルされていたというのがほんの20年ほど前のことだったとは驚きでした。今では『タンタンタンゴはパパ二人』の絵本の読み聞かせなどで幼児の頃から自然とセクシュアリティを学ばせているのでしょう。

いろいろあって当たり前。いろいろある中で悩み考えながら自分の道を探していくのでしょう。

◆【 MM 】

作者の子どもに対する接し方に好感を持った。「お前は どう思う？」などと尋ねることが多いなと感じた。大人がヒントを出したりこういう方向に持っていきたいと意図を持って発言するのではなく問いをもって考えるきっかけを作る。まず自分の意見と向かい合わせる。そのあとで「母ちゃんはどう？」などと聞かれたら私の考えを言う。

このやり方が作者の生い立ちに関わる経験からきたものなのか、イギリスで生活するうちに身についたものなのかどちらなのだろう。イギリスでは政治や社会の問題に興味をもつこと、演劇を通して自分を表現することの授業があることを知った。日本人は「空気を読んで」相手のことを考えて行動・発言することがよしとされることがある。しかしその前に自分だ。自分は どう感じているのか。イギリスの教育が大事にしていることはこういうことなのかもしれない。

イギリスは人種や階級でも格差はあるし、出身でも差別を受けることはある。格差はあって

も差別することがなければいいのだがなかなかそうはいかない。日本は人種の差別は島国だから少ない、ということを使う人があるかもしれないが島国は外と内をわけず。日本の外から来た人、自分がいるコミュニティ外の人に差別をする人はいる。学歴や職業でも格差は生じているのではないか。貧困も差別される要因の一つだろう。

貧困家庭出身であることの表記の是非が読書会でとりあげられた。私が課題本を読んで感じたことは貧困家庭に育ったという事実はあるかもしれないけれど、作者は貧困であることを売りにしてはいない。だからわざわざ貧困家庭出身という紹介はいらないと思う。貧困は弱みではないという意見もあった。弱みでも強みでもないと思う。そういうことに言及しなくてもこの人の書くものには惹きつける力がある。

ひとつ気になった点は「息子、いい子すぎるなあ」ということ。カトリックの小学校から地元の元底辺中学校へ進学。クラスメイトの家庭環境もいろんな人がいる、人種も違うし移民もいる。いろいろな経験をしてはいるが道を外しすぎない程度に迷いながら前向きに進んでいるという印象だ。この本には続編があるのでそちらでは少年がどのように成長するのかなというのが大変気になる。